

# 神奈川施保連ニュース VOL. 63

発行人 神奈川県知的障害者施設保護者会連合会会長 岩本邦雄  
編集 同上 広報部会 HP: <http://w01.tpl.jp/~a368318200/>  
発行所 同上 事務局 〒235-0021 横浜市磯子区岡村3-15-14 岩本邦雄方  
TEL & FAX 045-751-1010



神奈川施保連主催  
やまゆり知的障害児者生活サポート協会協賛 講演会  
テーマ「一生涯を支える支援の仕方」  
S「終の住処をどこに」・「看取り」  
講師：社会福祉法人同愛会理事長  
高山和彦氏

《参考》社会福祉法人同愛会  
(以下、同愛会とする。)の  
概要

同愛会は、昭和53年7月、横浜市保土ヶ谷区に精神薄弱者通所授産施設として事業をスタートし、障害児・者および高齢者に対するさまざまな福祉サービスを提供している。正規職員数749人(平成25年7月現在)。横浜、川崎および東京の3事業本部で36施設を展開。

## 講演会概要

今日は、我々が横浜の「てらん広場」という収容型の施設を中心にして実践していることをお話したい。法人は「人生(存在)への支援」を理念として事業を展開している。人は誰でも他者に依存して生きている。「じりつ(自立+自律)」とは、親以外の依存先をたくさんつくことで、適切な支援を得て自分らしい人生を送ることである。

適切な支援を得て自分らしい人生を送ることである。

法人は様々な社会資源を活用しながらその人に必要な支援を行い、障害児・者や高齢者が真に「じりつ」した人生を送れるようにしている。知的障害児・者の幸福が実現できるように一緒に歩いていきたい。

ここに居られるご家族は色々な事情で施設に子供さんを預けられ、我が子にとって最も良い選択をしたと思っておられると思う。

しかし、今の施設の状況の中で彼らが安心して受け入れられるところが有るのか、そして彼ら自身が自由で何よりも自分の幸福を追求していくことを、彼らと一緒に歩いていく施設がいくつあるのだろうか。

平成4年に「てらん広場」を作るとき、「大きな食堂で一斉に食事をしない。大きな風呂に順番に入れない。個室を作ると同時にこの施設に入ることに本

人が納得する。そして、通過して行く。「ためにどんな支援が必要なのか考えた。

いかに重度であっても、いつでも収容型施設にいないで地域に出て行く。大部分はGHを想定し、それがかれらにとっての社会参加、「じりつ」だと考えた。そして働くことを基本とした。その人に沿う「じりつ」でなくてはいけない。

施設は一人一人に必要な支援で「じりつ」してもらおうが使命だ。GHから施設に帰りたいという人はいない。一人一人の幸福を追求することをつくっていくのが私たちの仕事だ。今までに、100人位が「てらん広場」を通過して行った。

## 《事例1》35歳まで加齢児で児童施設に入られていた方ケース

2歳の時に運河の河畔に捨て置かれた方で乳児院から児童施設へ行かれ児童施設で33年間を過ごされた。総合判定生活状況では夜間動き回る子がいるためか睡眠不足、日中はすることがなく日向ぼっこ、作業も長続きせず過ごしていた。面接に来られた時は両脇を職員に支えられていた。知能検査では測定不能な最重度の方だった。

その方が、「てらん広場」を経由してGHへ行き、仲間と一緒に人生を暮らしていただける。

大晦日の夕食では少しワインを飲んで赤くなっておられた。正月に海に行った時の写真はスクット背筋の伸びた姿で、今自分が生きていることに自信を持っておられると受け取ることができる。

来年は還暦を迎えられ、老化も進んできたが、本当に支援をして良かったと思っている。

私たちは高齢期の知的障害者の特養等の高齢福祉施設の対象とする考えには反対である。

入所施設でしか生活したことのない人に全く違った環境(様々な人生経験と社会生活を体験した人たちの老後のための施設)で老後を暮せというのは間違いだ。高齢になって不安になり、自分にとって支えが必要となる時に全く知らない世界には行かせない。

また、認知症になった知的障害者だからと言って高齢施設に送って良いというものでもない。

これまで送ってきた人生の集大成の時期に突き離すこととはできない。認知症の人に直接話を聞くと、「不便なことが有り、出来ることが少なくなってきたも、出来ることが有り自分らしさを失わない生き方をしてる。」

という。これは、知的障害者の場合も同じだ。分からない人ではなく、僕らが分かるうとしていないだけだった。一緒に暮らしてきた仲間との一時があり、それを重ねていくことで安心して死を迎えられる。高齢施設に行ったのでは決してできない。

### 《事例2》知的障害の娘さんが認知症になった時の両親のケース

お母さんは、娘さんが精薄で生まれ、ダウン症で、この年になつて認知症になつて「ああ情けない」とすぐく嘆かされていた。そこで、認知症とは何かについて、認知症の方からお母さんにミニ講演会をしてもらった。その後、娘さんが帰宅されたとき、お母さんが「ユミちゃんご免なさいね。今までお母さんは鬼みたいだったけど、これから昔の優しいお母さんに戻るからね。ユミちゃん辛らかったね。ご免なさい。」と謝られた。そうしたら、これまで帰宅の度に雨戸をバタバタ開け閉めし、大声を出して眠らなかつた彼女が嘘のようにおとなしく2晩寝て、月曜日にホームに帰つて来た。



GHと皆さんの支援の中では安心だ。と僕に話された。お父さんは亡くなり、お母さんの認知は進み、最近では娘さんを見て、「かわいいわね。貴女はどなた。」といつておられる。本当に切ないが、人が生きることができており、幸せだと思つた。

知的障害者にも死への不安がある。その不安を無くすのが我々の仕事だ。人が生きることが実現したい。人は共に生きた時間を共有して、僕らの記憶の中に生き続ける。

そのことが分かれば不安は和らぐ。看取りは、本人が望めばやる。GHでは在宅者の介護サービスが使えるので、介護サービスと障害者サービスをつかつて色々なことができる。

日本では冠婚葬祭ができることがノーマライゼーションともいえる。GH利用者が喪主になつて自分が見送る支援をすることもできる。GHは血縁を伴わない生活の場で、看護と介護の手がある所だ。看取りは難しい事ではない。経済的にも大変な方が多いし、親もだんだん亡くなつていく。看取りは今や当たり前のことになつている。知的障害者も死への恐怖はあり、それにどう向き合つて支えていくかが重要。戦後、

やつと友を送る哀しみを一緒にできる看取りのできる福祉が実現できた。《事例3》漸進性障害だがGHで暮らしておられる方のケース

知的障害の上、50代後半で頸椎の進行性の病気で歩行ができなくなり還暦を迎えた時には、完全に全身性障害になり首が動くだけの状態。言葉は出るが、右手の指先が動くのみ。ベッドから車椅子に移乗して、日中活動の場に向かう。

彼は先月、多発性潰瘍で胃を全摘出した。本人がGHに戻りたいといわれるので、戻つていただいて3か月が経つ。リスクは非常に高い。今は寝たきりで6回の食事はペースト状。彼の生活を支えるために、訪問医、訪問看護、ケアマネージャ、彼のサービス責任者およびホーム全体の支援者を加えて20人のチームで支援している。

そして、この先どのような支援ができるかサービス計画を作成して、第3者のチェックを受けてできるだけやっていきたい。

僕らは運動体であり、差別の状況から解放され個としての幸福を実現する支援が本業であり使命でもある。親亡き後の不安を払拭していくのが障害者の「じりつ」で、それを支えるのが僕らの役割だ。今、能力主義が大きな価値となつて、知的障害の人達を抑圧しており、21世紀になつて戦後作ってきた憲法25条(すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。)に基づ

く知的障害者の障害福祉が段々危うくなつていく。しかし、このことを共有し、彼らが安心して暮らして行ける社会を実現して行きたい。横浜事業本部では、390人程(内、区分5・6の方は169人、4以上の方が259人ある)がGHで生活できている。

GHの担い手が少ないとか国がどんな制度を変えていく中で、不安の要素は沢山あるが、現在獲得しているこの状態を譲り渡すことのない社会を持続させて行きたい。

### Q&A

Q・気持ちだけではなかなか高度な支援はできない。どんな人材育成をしているのか?

A・持続して行く仕組みづくりが重要だ。看取りの議論は終わっており、法人のDNAをどう伝えていくか、この仕事の本質的な意味を日常的に問い直していくことが重要。人の存在の証は今在ることで、そのことの素晴らしさを施設運営者が職員に伝え、職員がそれぞれに議論して障害者がどういうケアを必要としているかを追及して、互いに生きていることを実感していくこと。そして職員が長期に働くことのできる環境づくりをしている。待っているも人材はこない。人間性あふれる仕事なので、関係者がその楽しさを伝えていかななくてはならない。私は生まれ変わってもこの仕事かしたい。他に数件の質問あり。以下略 以上